



写真：飛鳥園

第 7 回

「あしゅらぞう
阿修羅像 上半身(部分)」

乾漆・彩色 高さ153cm 734年
興福寺蔵(奈良県)

※新版教科書『美術2・3』の巻頭ページに掲載

阿修羅の魅力

09年、東京国立博物館で開催された「国宝・阿修羅展」で巻き起こった空前の仏像ブーム！と思いきやその後の仏像展の動員はさほど振るわず、やはり奈良・興福寺の阿修羅像の人气がハンパじゃなかったことがようやく世間的にも分かってきた。

それまで仏像といえば大概、修学旅行で見た奈良の大仏。「大っきいなァ」という感想しか持てなかった輩はその後、パンチパーマの大きな像であれば何だって仏像だと思込んでいる。しかし、阿修羅像は三面六臂の異形のお姿。髪は結い上げ、その一つ一つの顔は美少年であり、下唇を少し噛んだ表現や眉間に少しシワを寄せ思いにふける表情はイメージの仏像とは大きく違う。

ルーツは古代インド語の“アスラ”。仏教が流布する以前の戦闘神だったアスラは、後に仏教に帰依し、“八部衆”(天・龍・薬叉・乾闥婆・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・阿修羅)に取り込まれたのである。だから、厳密に言えば阿修羅像は仏像ではない。そもそも仏の定義とは悟りを開いた覚者のことであり、それをフィ

ギュア化したのが仏像。悟った姿の如来と、悟ることを約束されているお姿、菩薩像まで。しかし、日本に伝来した時の仏教は既に大乘仏教であり、日本独自の神仏習合といった大らかな考え方も相まって全てを“仏”、または仏像と呼ぶようになったに違いない。

下っ腹が出てぽっちゃりとした体型の如来像と比べ奈良・興福寺の八部衆はどれもがスリムである。たとえ毒蛇を食らう神・迦楼羅(顔は鳥天狗)であっても、体は少年のようで表情はとても優しい。それは、一重にプロデュース(勅願)が女性(光明皇后)であることが大きいだろう。阿修羅に至っては“修羅場”なんて言葉があるようにかなり荒ぶった神であることは確か。その修羅場の虚しさを悟ったかのような繊細な表情には、今でいうジャニーズのセンスが入っているような気がする。いつの時代も女性が美少年に魅せられるのは同じ。そこが大きく他の仏像と違っていた点である。展覧会以降、“阿修羅超え”なる言葉まで生まれ、どの仏像が次にブームを起こすのか？ 仏のみぞ知る。

みうらじゅん

1958年京都府生まれ。
作家、漫画家、イラストレーター、ミュージシャン。
1980年武蔵野美術大学在学中に『月刊漫画ガロ』で漫画家デビュー。
著書に『アイデン&ティティ』、『色即ぜねれいしょん』など多数。友人のいとうせいこうと全国の仏像を鑑賞しまとめた紀行文『見仏記』シリーズが好評。
興福寺公認の「阿修羅ファンクラブ」の会長を務める。